

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第123集

NISHIMURANAKA

# 西村中遺跡

長野県佐久市根岸西村中遺跡発掘調査報告書

2005. 2

佐久市土地開発公社

佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第123集

NISHIMURANAKA

# 西村中遺跡

長野県佐久市根岸西村中遺跡発掘調査報告書

2005.2

佐久市土地開発公社

佐久市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、佐久市土地開発公社が行う佐久市西部地区老人福祉拠点施設整備事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2 調査委託者 佐久市土地開発公社 理事長 三浦 大助
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会 教育長 高柳 勉
- 4 遺跡名及び発掘調査所在地積 西村中遺跡（NMN）  
佐久市大字根岸字阿らや 115
- 5 調査期間及び面積 調査面積 979 m<sup>2</sup>（開発面積 11,373 m<sup>2</sup>）  
平成 16 年 4 月 19 日～平成 16 年 5 月 26 日（現場作業）  
平成 16 年 5 月 17 日～平成 16 年 2 月 28 日（整理作業）
- 6 調査担当者 出澤 力
- 7 本書の執筆・編集は出澤が行った。
- 8 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

- 1 遺構の名称 西村中遺跡（NMN）
- 2 遺構の略称は、以下の通りである。  
・溝状遺構-M ・土坑-D
- 3 縮尺は、遺構については図中に明記し、遺物は基本的に 1/4 とした。
- 4 遺構の海拔標高は、水系標高を「標高」として記している。
- 5 土層の色調は、1988 年度版「新版 標準土色帖」による。
- 6 写真図版中の遺物の縮尺は挿図と概ね同じであるが、それ以外のものについては図版中に明記してある。また、写真図版と挿図の色については、同一である。
- 7 挿図中における土器断面の塗りつぶし表現は須恵器断面を意味する。その他、図中の表現について、特殊なものについては挿図中に明記してある。

## 目 次

### 例 言

### 凡 例

#### 第 1 章 発掘調査の概要

第 1 節 調査の経緯	(1)	第 2 節 調査組織	(2)
第 3 節 調査日誌	(2)	第 4 節 遺跡の立地と歴史的環境	(2)
第 5 節 基本順序	(7)	第 6 節 遺構・遺物の概要	(7)

#### 第 2 章 遺構と遺物

第 1 節 遺 構	(10)
第 2 節 遺 物	(14)

### 写真図版

# 第1章 発掘調査の概要

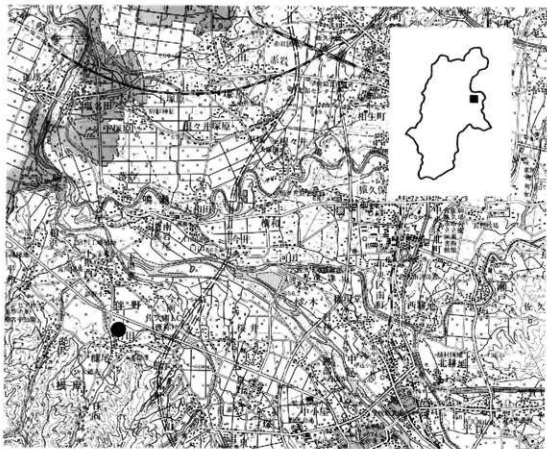
## 第1節 調査の経緯

西村中遺跡は佐久市根岸地籍にあり、佐久市内の南西、浅科村との境に近い。遺跡の周辺は水田が続く田園地帯であり、北西側には立科山麓の末端を見ることが出来る。

本遺跡周辺では種々の遺跡がこれまでに確認されており、遺跡より北側の丘陵部では後沢遺跡、中村遺跡、筒村B・山法師遺跡と言った縄文時代の遺跡が、西方の極名平遺跡では縄文～中世にかけての遺跡、特に中世の上層の屎敷跡と思われる遺構が確認されている。また対象地から北東に目をやれば、近年建設された虚空蔵山狼煙台の展望台を見付けることが出来る。

平成15年度、佐久市土地開発公社により佐久市西部地区老人福祉拠点施設整備事業が計画され、計画対象地内の遺跡の有無の照会があった。ビニールハウス等の残る一部分を除く対象地内について試掘調査を実施、結果、対象地の一部に遺構・遺物を認めた。その結果を踏まえ保護協議が行われ、遺構の確認された部分について、記録保存を目的とした発掘調査が行われることとなった。

また、平成15年度に試掘を行えなかった部分についてはビニールハウス等の移動が終了した平成16年度に試掘調査を実施し、遺構・遺物ともに存在しないことを確認している。



第1図 西村中遺跡 位置図 (1:50,000)

## 第2節 調査組織

- 発掘調査受託者 佐久市教育委員会  
教育長 高柳 勉
- 事務局  
教育次長 赤羽根寿文  
文化財課長 小林 正衛  
文化財係長 高村 博文  
文化財係 林 幸彦 須藤 隆司 小林 真寿 羽毛田卓也 富沢 一明 上原 学  
赤羽根太郎 出澤 力
- 調査体制  
調査担当者 出澤 力  
調査員 浅沼ノブ江 阿部 和人 市川 昭 岩崎 重子 江原 富子 磯水 知子  
小幡 弘子 柏木 義雄 菊池 喜重 佐藤志子 中嶋フクジ 比田井久美子  
細萱ミスズ 武者 幸彦 百瀬 秋男 渡邉久美子 渡辺 長子

## 第3節 調査日誌

- 平成15年度  
平成16年3月15日 試掘調査。一部に遺構を確認する。  
～23日
- 平成16年度  
平成16年4月19日 重機による表土削平、及び器材搬入をおこなう。  
4月20日～ 現場作業開始。調査区の精査、検出作業。  
溝状遺構・土坑掘り下げ。  
5月19日 発掘調査終了。  
5月26日 現場埋め戻し終了。  
5月17日～ 室内作業開始。遺物洗浄、注記、接合、土坑内覆土の微細遺物の検出、図面修正、報告書編集作業。  
7月8日 試掘未着手部分の試掘調査実施。開発対象地域全ての調査が完了する。
- ～平成17年2月28日 室内調査終了。報告書刊行。

## 第4節 遺跡の立地と歴史的環境

### 遺跡の立地

西村中遺跡は佐久市の西南部、浅科村との境に近い根岸地籍に存在する。対象地は水田で、遺跡周辺は圃場整備事業によって区画整理された水田の広がる田園地帯である。

遺跡から南西には蓼科山山塊、八ヶ岳山塊があり、遺跡北方には千曲川が流れる。本遺跡も南側



に立科山麓の丘陵を背負い、西に目をやれば厚牛年金福社施設「サンピア佐久」の立地する大地が望める。後述する平成5年度より縄文時代の竪穴住居址から中世の屋敷跡を発見した樺名平遺跡の発掘が行われたのはここである。また南東側の丘陵には、近年展望台が建設された虚空蔵山観音台をすぐ眼前に望むことが出来る。

佐久市西部の地形は、大別して3つに分けられる。第1に遺跡西南に位置する豊科・八ヶ岳山塊が形成する北東方向に伸びる丘陵地や、山間を流れる倉沢川、小宮山川などの中小河川に伴う谷口扇状地、第2に千曲川の自然堤防で帯状に広がる沖積地、第3にそれらに挟まれた片貝川の周辺に広がる沖積低地である。

本遺跡は、この第1の地形と第3の地形の間とも言える立地にある。遺跡の西方にはまさに片貝川が南北に縦走しており、試掘時にトレンチを測定した調査区北東の一部では水田層の下より2m以上堆積した泥炭層を確認し、当地が低湿地であったことがうかがえたが、遺構の確認された調査区中央では南北に伸び調査区内で姿を失う微高地が認められる。微高地は南側の丘陵から続くものと思われ、本対象地は丘陵部から伸びた微高地が沖積低地で姿を失う、ちょうどその地域に当たると考えられる。

## 歴史的環境

今回調査が行われた西村中遺跡は、これまで西村中遺跡として周知されていた範囲からはやや離れているが、丘陵の同一微高地上に展開しており、また山上した遺物の時期も同じであるため、同一の遺跡として名称が与えられた。

本遺跡周辺では、旧石器から中近世まで、多くの遺跡の発掘調査が行われており、ここでは、西村中遺跡周辺の遺跡について各時代ごとに触れ、周辺の歴史的環境について概観したい。

本遺跡から南西、八ヶ岳北東山麓中に旧石器時代の遺跡である1. 立科F遺跡が存在する。同遺跡では総数211点の石器群が検出されており、石材、検出土層より最古で31200・900という年代が与えられている。

沖積低地に向する山麓の丘陵や扇状地には、縄文・弥生時代の遺跡が認められ沖積地上に展開するそれ以降の古墳・奈良・平安時代などの遺跡とは対照的な分布を示している。縄文時代の遺跡では2. 後沢遺跡、3. 中村遺跡、4. 筒村・山法師B遺跡、5. 瀬の下遺跡などが調査されており、前述後沢遺跡、6. 西裏、竹田峯遺跡では弥生時代の住居址や周溝墓などが確認されている。前述7. 樺名平遺跡では、縄文時代前期中葉から中期後半にあたる竪穴住居址20軒、十坑5基、多量の土器、石器が出土した埋没谷2箇所が確認されている。また8. 東五里田遺跡では、十坑内から弥生前期水Ⅱ式土器の一定量の出土を認め、この時期の資料の少ない佐久市において貴重な資料を得た。

9. 市道遺跡は、南佐久の沖積地における埋蔵文化財調査の先駆となった調査の一つであり、それに前後する10. 徳田遺跡や11. 中道遺跡、12. 三塚遺跡、13. 三塚町田遺跡、14. 三塚鶴田遺跡、15. 跡部町田遺跡などとともに、佐久市における埋蔵文化財保護の推進に足跡を残した調査である。これらの調査では、古墳時代中期から後期、奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。

その後古墳時代後期と平安時代の住居址を調査した16. 上桜井北遺跡、中期から後期の住居址を調査した17. 寺添遺跡、後期の住居を調査した18. 市道遺跡Ⅱ、古墳時代後期と平安時代住居址、中世の竪穴状遺構と土坑墓、及び沖積地上においてはこれまでほとんど確認されなかった古墳時代前期の竪穴と器台が併せて山上する土坑を認めた19. 宮添遺跡といった発掘調査が行われた。前述の市道遺跡などを含めて、これらはいずれも千曲川の自然堤防上や沖積微高地にあり、古墳時代中期以降、生活基盤の変化から当地における生活空間の中心が山間、山麓から稲作等の農業生産に適した沖積地に移行したことが見て取れる。

奈良・平安時代の遺構は筒村・山法師B遺跡、上桜井北遺跡、寺添遺跡、市道遺跡Ⅱ、宮添遺跡、東五里田遺跡などで認められている。その分布状況はほぼ前時代と同様の広がりを見せ、沖積地上や山裾に集落が営まれていたと思われる。沖積地においては20. 舞台場遺跡で住居址29軒、21. 跡部徳田遺跡では古墳時代も含めおよそ70軒という規模の大きな集落が営まれている。山裾に位置する樺名平遺跡と前述した中道遺跡から奈良三彩と思われる器が出土していることから当地にこの時期、専ら集落が存在した可能性を指摘できる。

中世鎌倉時代以降ではこの地は、佐久地方における有力豪族のひとつである伴野氏の本拠地となり、「一遍上人絵伝」の中に当時の伴野氏の活況な様子が伝えられている。本遺跡周辺の中世の遺跡では、伴野氏の手による物とされる22. 前山城址や、23. 野沢館跡などがあり、近年24. 野沢館跡Ⅳでは、主郭部分において土塁と堀の確認調査が行われ、幅10m以上の堀の存在と戦国期に土塁と館の整地が行われたことを明らかにした。また25. 薬師寺遺跡は野沢館跡内に近世初頭に移転されたと思われる薬師寺の本堂改築に伴う発掘で、近世中期から近現代にわたる寺院に關係

する遺物が出土し、さらにその下からは野沢館跡に關係する池の跡が確認され、かわらけ・土鍋といった中世の遺物が出土している。東五里田遺跡では中近世野沢の屋敷地に開墾すると考えられる堀立柱建物址と溝状遺構が発見された。26. 虚空蔵山狼煙台では、直接山城に関連すると思われる遺構は見つからなかったが、緩斜面の北端部分において3段に構築された竃穴状遺構が確認されている。そのほか横名平遺跡では、中世後期の土葬墓、火葬墓といった墳墓群、及び丘陵から水田地帯を流れる河川の河口に位置し水利権を掌握した土豪の屋敷跡と考えられる中世の遺構群が調査されている。

本遺跡周辺、丘陵部分には多くの古墳が存在するが、発掘調査がされたものは少ない。27. 瀧の峯古墳群は市志編纂事業の一環として学術調査が行われ、前方後方型の型の墳丘墓が2基検出された。2号分の周溝内からは壺、小型壺、埴、鉢、高坏、器台が出土し、これらの土器群によって4世紀後半の所産と考えられている。その他後期古墳として28. 横名平1号墳や、29. 坪の内古墳の調査が行われている。丘陵部分が古墳時代、付近の古墳時代集落の墓域として設定されていたことが窺える。

その他の遺跡としては、生産遺跡として30. 石附窯址群がある。数回の調査によりこれまでに2基の須惠窯窯と5基の炭焼窯を認め、これら窯址が出土須恵器により7世紀後半から末の所産であることが分かっている。付近に河川があり、丘陵に広がる林野より燃料を容易に得ることが出来る当地は、窯業を行うのに適した地であったのだろう。

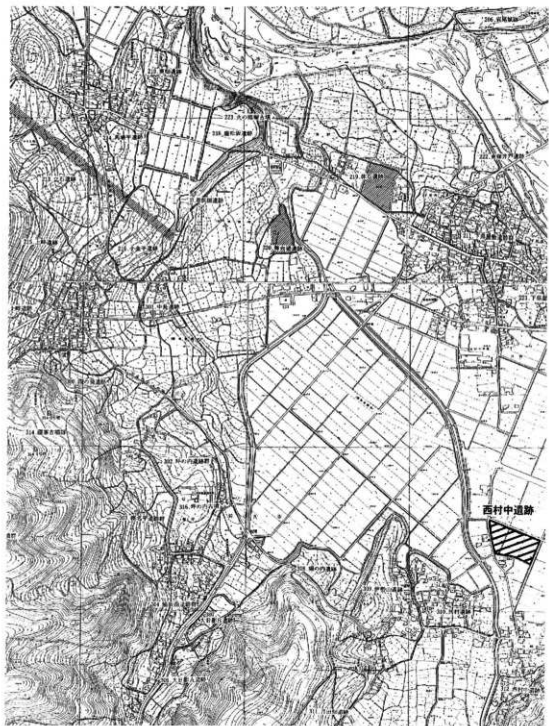
No.	遺跡名	所在地	立地	旧	縄	弥	古	歴	中	近	備考
1	立科F遺跡	前山字立科	山地	○							平成2年調査
2	後沢遺跡	小宮山字後沢	丘陵		○	○	○	○			昭和51・52年調査
3	中村遺跡	根岸字日向	山地		○						昭和57年調査
4	岡村B・山法師B遺跡	根岸字日向	山地					○	○		平成2・3年調査
5	瀧の下遺跡	前山字瀧の下	丘陵		○						平成2年調査
6	西裏・竹田峯遺跡	根岸字西裏・竹田峯	丘陵			○	○	○			昭和60年調査
7	横名平遺跡	根岸字横名平・坪の内	丘陵		○	○	○	○	○		平成5・6年調査
8	東五里田遺跡	野沢字東五里山	沖積微高地			○	○	○	○		平成14年度
9	市道遺跡Ⅰ	三塚字市道	沖積微高地				○	○			昭和49年調査
10	備田遺跡	野沢字備田	沖積微高地		○	○					昭和45年調査
11	中道遺跡	前山字中道	沖積微高地				○	○			昭和46年調査
12	三塚遺跡	三塚字東野沢田	沖積微高地		○	○	○				昭和49年調査
13	三塚町田遺跡	三塚字町田	沖積微高地				○				昭和49年調査
14	鶴田遺跡	三塚字鶴田	沖積微高地					○			昭和50年調査
15	跡部町山遺跡	跡部字町山	沖積微高地					○			昭和50年調査
16	上板井北遺跡	板井字鶴詰	沖積微高地				○	○			昭和52年調査
17	寺部遺跡	三塚字寺部	沖積微高地				○	○	○		平成6年調査
18	市道遺跡Ⅱ	三塚字市道	沖積微高地				○	○	○	○	平成10年調査
19	宮浜遺跡	三塚字宮浜	沖積微高地				○	○	○		平成11年調査
20	舞台場遺跡	根岸字反り田	河岸段丘				○	○			昭和56年調査
21	跡部徳山遺跡	跡部字徳山	河岸段丘				○	○			平成11年調査
22	前山城跡	前山字城山	山地					○	○		
23	野沢館跡	野沢字居屋敷・北田	沖積微高地				○	○			平成3・13・15年調査
24	野沢館跡Ⅳ	野沢字居屋敷	沖積微高地					○			平成14年調査
25	薬師寺遺跡	原字屋敷	沖積微高地					○	○		平成11年調査
26	虚空蔵山狼煙台	根岸字比良・日高影・宮脇	山地						○	○	平成14年度調査
27	瀧の峯古墳群	根岸字瀧の峯	山地				◎				昭和61年調査
28	横名平1号墳	根岸字横名平	丘陵								平成5・6年調査
29	坪の内古墳	根岸字坪の内	丘陵					◎			平成5・6年調査
30	石附古窯址群	根岸字石附	丘陵						○		昭和56年調査

第1表 西村中遺跡 周辺遺跡一覧表



第2圖 西村中遺跡 周辺道路分布圖 (1:50,000)





第3图 西村中道跡 周辺地形图 (1:10,000)

## 第5節 基本層序

発掘対象地の北側東西端付近に、トレンチを設定し基本層序を抽出した。下图はその横相を柱状図に表したもの。圃場整備後の水田層の下、Ⅱ層が造構確認面。東側Ⅲ層は泥炭層であり、試掘時に一部を掘削した際には2m以上の堆積を認めている。

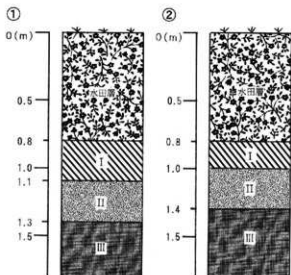
基本層序

### ① 調査区東側層序

- I. 暗褐色土 (10YR3/3) パミス、小礫多く含む。
- II. 黒褐色土 (10YR2/2) パミス、小礫含む。土中に鉄分を含む。
- III. 黒褐色土 (10YR3/1) 泥炭層。

### ② 調査区西側層序

- I. 暗褐色土 (10YR3/3) パミスを少量含む。
- II. 黒褐色土 (10YR2/1) パミス少量、シルト質土を混入する。
- III. 黒褐色土 (10YR2/1) パミスを微量含む。シルト質土を少混入する。



第4図 基本層序柱状図

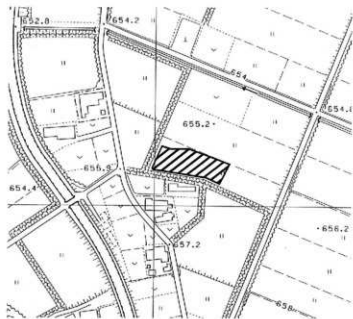
## 第6節 遺構・遺物の概要

### 検出遺構

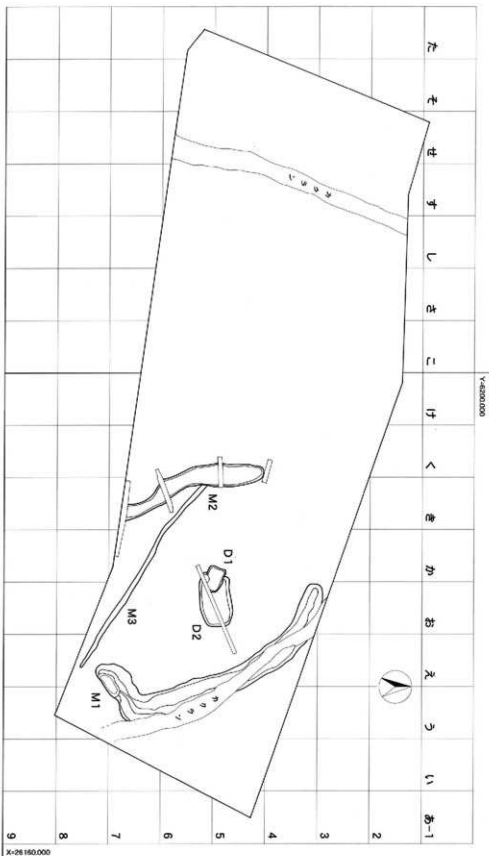
溝状遺構	4条
土坑	2基

### 出土遺物

縄文土器 (深鉢)、破片  
 弥生時代土器片、奈良・平安時代  
 土器片・黒曜石片



第5図 西村中道跡 位置図 (1:2,500)



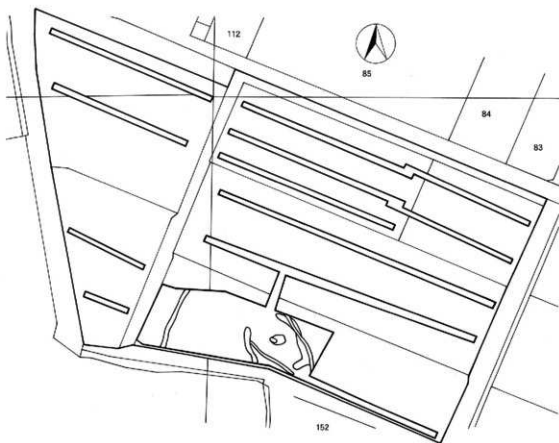
第6図 山梨中濃路 全体図 (1 : 250)

## 第II章 遺構と遺物

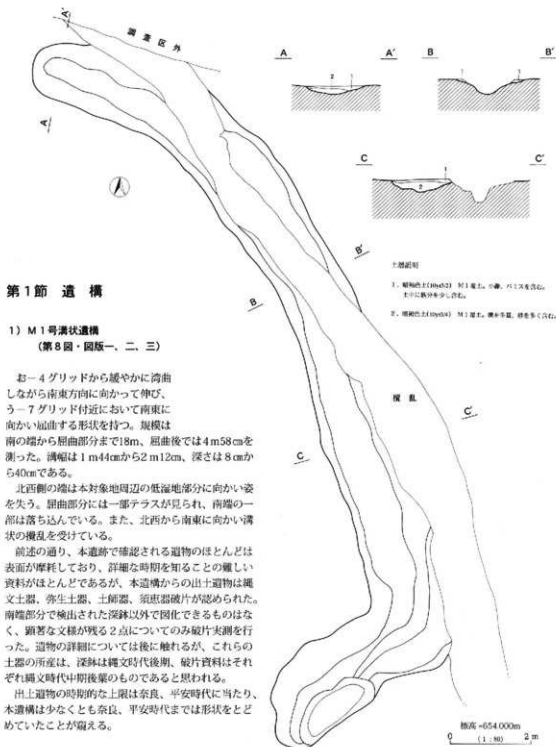
西村中遺跡では前述の通り、遺跡南側の丘陵から南西に伸びる舌状の微高地に遺構が立地する。発掘調査に先だって行われた試掘調査では微高地の北側や西側で一部では2m以上の堆積が認められる泥炭層が確認されており、今回の調査地点が微高地の舌端部であることが窺えた。

今回の調査では遺構確認面で検出時に多くの土器片・及び黒曜石片を認めたと、その土器片のほとんどは表面が著しく摩耗した状態で発見されている。かつては試掘時に確認された泥炭層が示す通り、この周囲は低湿地だったのだろう。これらの遺物のほとんどが、おそらく周囲の河川や、その他の水の作用によって本対象地周辺に存在する遺跡から流れ込み、堆積したものと考えられる。

今回の調査によって微高地上から確認された遺構は溝状遺構3条と土坑2基である。M1号溝状遺構と切り合う攪乱と、調査対象地の西側で南北に走る攪乱は、それぞれ自然流路と考えられ、M1号溝と切り合う攪乱は調査区東側の低湿地に向かい明確な姿を失った。



第7図 西村中遺跡 概略図・トレンチ設定図 (1:1000)



## 第1節 遺構

### 1) M1号溝状遺構 (第8図・図版一、二、三)

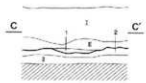
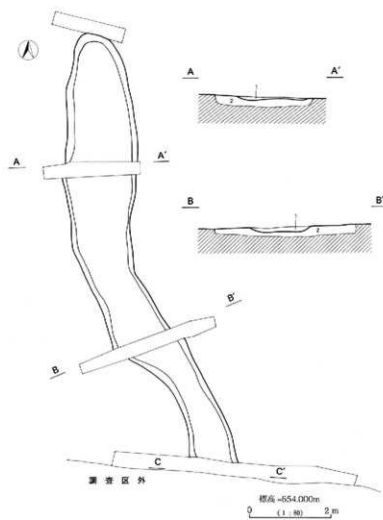
おー4グリッドから緩やかに湾曲しながら南東方向に向かって伸び、うー7グリッド付近において南東に向かい屈曲する形状を持つ。規模は南の端から屈曲部分まで18m、屈曲後では4m58cmを測った。溝幅は1m44cmから2m12cm、深さは8cmから40cmである。

北西側の端は本対象地周辺の低湿地部分に向かい姿を失う。屈曲部分には一部テラスが見られ、南端の一部は落ち込んでいる。また、北西から南東に向かい溝状の擾乱を受けている。

前述の通り、本遺跡で確認される遺物のほとんどは表面が摩耗しており、詳細な時期を知るための確しい資料がほとんどであるが、本遺構からの出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器破片が認められた。南端部分で検出された深鉢以外で固化できるものはなく、顕著な文様が残る2点についてのみ破片実測を行った。遺物の詳細については後に触れるが、これらの土器の所産は、深鉢は縄文時代後期、破片資料はそれぞれ縄文時代中期後葉のものであると思われる。

出土遺物の時期的な上限は奈良、平安時代に当たり、本遺構は少なくとも奈良、平安時代までは形状をとどめていたことが窺える。

第8図 M1号溝状遺構 実測図



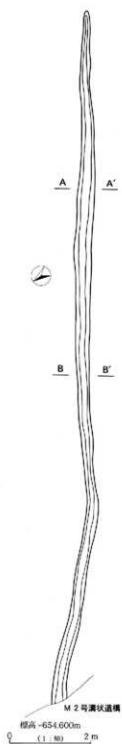
土層説明

- I. 近代の赤土層。
- II. 地山礫上の赤土層
- 1. 粘粉土 (10y1.5) M2層上。パリス、手掘り等<石灰。
- 2. 泥粉土 (10y2.5) 地山、パリス有高低。赤土質土。
- 3. 黄土 (10y1.7) 泥灰土。

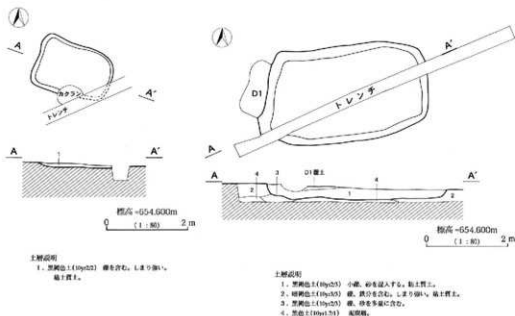


土層説明

- 1. 粘粉土 (10y2.5) M3層上。パリス等<石灰。L土等、粘粉土等。



第9図 M 2・3号溝状遺構 実測図



第10図 D1・2号土坑 実測図

## 2) M2号溝状遺構 (第9図・図版二、三)

きー7グリッドの調査区外よりくー5グリッドまで南北に伸びる本遺構の、調査対象区内11m36cm分について調査を行った。溝幅は80cmから1m76cm、深さは6cmから12cmを測る。断面形状は非常にゆるやかで、地形の傾斜に準じ南側の方が深く、北端部で溝はその形状を消失する。M3号溝を切る。

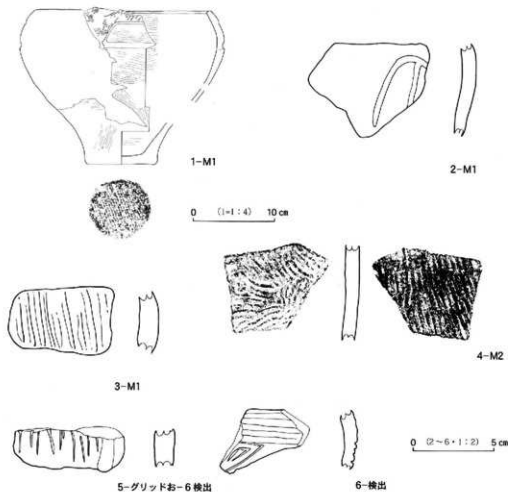
出土遺物はM1号溝状遺構と同様に縄文、弥生、奈良・平安時代土器片である。須恵器製の割部破片を1点同化する。出土遺物内には底部にヘラキリの痕跡を残す須恵器環などが見られ、本遺構出土の遺物の時期的上限は奈良時代であり、M1号溝状遺構とほぼ時期を同じくする。

当初、M1・2号溝状遺構の形状から、本遺跡の東方に位置する後沢遺跡では弥生時代後期に当たる方形周溝溝3基が確認されていることもあり方形周溝の周溝である可能性が考えられた。しかし調査の結果、溝の北側での消失や遺構から出土する遺物にそれを裏付ける具体的な資料を認められなかったことから方形周溝ではないと思われる。

## 3) M3号溝状遺構 (第9図・図版二)

きー6グリッドのM2号溝状遺構から、南東に向かいおー8グリッドまで伸びる。M2号溝状遺構に切られ、規模は全長16m96cm、溝幅は16cmから40cm、深さは8cmから17cmを測る。

出土遺物は確認されず、遺構の時期、性格については明らかに出来ない。



第11図 西村中遺跡 出土遺物

4) D1号土坑 (第11図・図版三)

お、か-5, 6グリッドに位置し、D2号土坑を切り、小規模な円形の擾乱によって切られる。形態は東西に長い長方形を呈し、規模は長軸長1m92cm、短軸長1m28cm、深さは8cmを測る。底面は平坦である。出土遺物等は確認されなかった。

5) D1号土坑 (第11図・図版三)

お、か-5, 6グリッドに位置し、D2号土坑と小規模な円形の擾乱によって切られる。形態は東西に長い剛丸方形を呈する。規模は長軸長4m16cm、短軸長2m32cm、深さは28cmを測った。底面は平坦である。



本遺構は、当初方形周溝墓土坑墓部分に当たる可能性を考慮し、覆土を徹底的に掛け、細密な遺物について調査が行われたが、骨片、瓦類など墓に関係する遺物は皆無で、黒曜石片、縄文土器片、弥生土器片が確認されたのみだった。

## 第2節 遺物

前述の通り、本遺跡で図化した遺物はM1号溝状遺構出土の深鉢1点と、破片実測による5点のみである。その他については全て破片であり、また摩耗により表面の文様等の存在しないものであるため図化は出来なかった。

1はM1号溝状遺構の覆土中より出土した。器高は18.2cm、口径21.2cm、底径8.2cm、緩やかに胴部の張り出した深鉢で、最大径は25.0cmを測る。色調は上器表面でふい黄褐色(10yr5/3)、断面では明黄褐色(10yr6/7)を表す。胎上中には1mm以下の白色と黒色の微細な粒子を認めた。器形は底部から外に向かって外湾し、最大径の付近で緩やかなふくらみを見せてから11径に向かい内湾する。表面は摩耗しているため調整、文様は完全に残ってはいないが胴部及び内面にはミガキ、胴部の最大径の部分に平裁竹管による太い沈線があり、そこから上方に台形のような細い沈線が伸び、沈線の外側に磨消縄文が施されている。磨消縄文については摩耗が激しくはつきりとしなない。また底部には網代痕が残っている。文様の確相は縄文後期、加曾利B2式のものに相似する。従ってこの深鉢は縄文時代後期の所産であると考えられる。

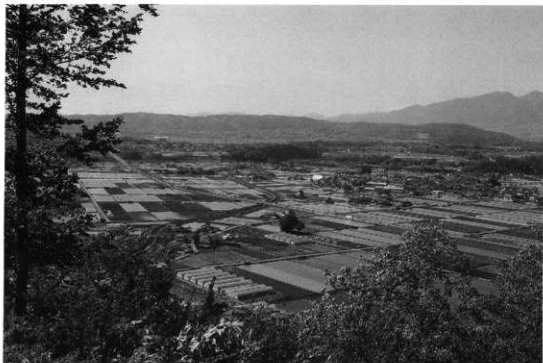
その他の破片資料については、2・3は同じくM1号溝状遺構覆土中からの出土で縄文時代中期後葉の所産。2はおそらく加曾利E式に見られる胴部縦方向の沈線の上部の文様であると思われる。

4はM2号溝状遺構から出土した須恵器の裏。共存する須恵器環破片の年代と照らせば奈良時代の物か。

5・6はそれぞれ遺構検出時に発見された遺物である。ともに縄文土器であるが5は中期後葉、曾利式の深鉢の底部付近の破片と思われ、縦方向の条痕と隆帯がある。6は縄文時代中期中葉、勝坂式の所産であろうか。

本遺跡で確認された遺物は、遺構内で発見されたもの、検出時に確認されたものを含め基本的にその出土遺物の傾向は一致する。主なものは縄文時代と弥生時代の遺物であり、ごく少数奈良平安時代の遺物が混入する。遺物の摩耗状況からこれらの遺物は本遺跡周辺より河川その他の影響により流入し、堆積したものと考えらる。

本遺跡周辺と言えばすぐ東側の丘陵上には縄文時代中期から後期、弥生時代後期の集落址である後沢遺跡が存在しており、本遺跡で出土した遺物が南より高地の丘陵上に存在する集落址から流出したものであることは想像に難くない。



西村中道跡 遠景（虚空蔵山より南む）



西村中道跡 全景（東より）



M 1号溝状遺構（東より）



M 2号溝状遺構（北より）



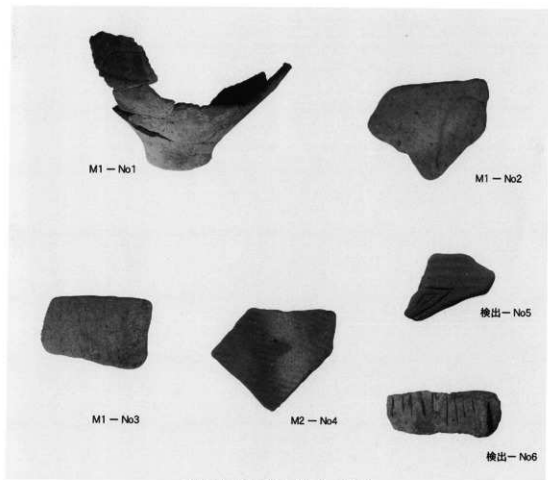
M 3号溝状遺構（西より）



D 1号 土坑 (東より)



D 2号 土坑 (東より)



西村中遺跡 出土遺物 (1=1:4・2~6=1:2)

---

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第123集

西村中遺跡

2005年2月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385 8501 長野県佐久市大字中込 3056

文化財課

〒385 0006 長野県佐久市大字志賀 5953

TEL. 0267 68-7321

印刷所 株式会社 樺くいちい

---

ふりがな	にしむらなかいせき
書名	西村中遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第123集
編著者名	出澤 力
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	200502
作成機関ID	
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市大字志賀5953
ふりがな	にしむらなかいせき
遺跡名	西村中遺跡
ふりがな	ながのけんさくしおおあざねぎしあざあらや115
遺跡所在地	長野県佐久市大字根岸字阿らや115
市町村コード	20217
遺跡番号	312
北緯	361420
東経	1382540
調査期間	20040419-20050228
調査面積	979
調査原因	佐久市西部地区老人福祉拠点施設整備事業
種別	散布地
主な時代	弥生時代
遺跡概要	溝状遺構 土坑
特記事項	